
g i h a d 《ジハード》

雨宮 彩月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジハード
g i h a d

【Nコード】

N 4 8 7 9 Z

【作者名】

雨宮 彩月

【あらすじ】

死者となってしまった彼がであったのは妖怪と天使と墮天使。彼らが出会う事はm何十億年も前の悲劇を引き起こす齒車を回す事に繋がっていた。

彼らが仲良く笑える日は来るのか・・・？ 初投稿、よろしくおねがいします。

俺

『綾小路 礼桜』
あやのこうじ れお

俺の命は今日、11月5日をもって終止符を打った。
16年という短い間だった。

俺の魂の宿らない体の周りに集まった人には、

「まだ若いのに…」

「可哀想に」

なんて言われた。

でも、そんな事言わないでくれ。

そんな事思わないでくれ。

何故かって？

俺はこうなつて満足しているんだ。

こうなる事を望んでいた。

だから嬉しいんだ。

別に自殺なんかじゃない。

人生を悲観していた訳でもない。

俺は昔から変わった子だと言われていた。

それは今から10年以上も前の事に遡る。

過去 1

幼い頃、俺は女手1つで育てられた。

父親は俺が生まれる前に事故に遭った。

……即死だったらしい。

それを偶然にも母親と祖母が話しているのを聞いてしまった。

確か4、5歳だったと思う。

それを知った頃から、俺は

『死ぬ』のたった二文字の言葉に疑問を抱いた。

『天国、地獄説』

『輪廻説』

たくさん言い伝えがあるけどそんなのあくまで想像、空想。

実際の事は誰にも分からない。

誰も知らない。

だからこそ興味を惹かれた。

それ以来俺は毎日、どんな時も『死ぬ』について考えていた。

いつか寿命や病気で死んでしまえば答えが分かる。

だからそれまでの何十年の長い時をかけてゆっくり考える。

俺は幼いながらに母親の苦勞を知っていた。

だから自殺なんて事は考えない。

俺は生きるだけ生きて死んでやる。

そう考えていた。

過去 2

そんな思いを胸に抱いて、気付けば俺は15歳になっていた。身長も体重も力も何もかも母親を追い越していた。

俺を見る度に、母親はいつも

「また…服が小さくなったね…」

「買わなくちゃいけないね。どんなのがいい？」と優しく微笑んで言った。

友達の中には反抗期のせいか親に暴言や暴力をした事があつたりしている人も居た。

でも俺はそんな気持ちになる事は無かった。

母親しか居ないから。

ニコリと微笑んだときに、できる笑窪。細くなる瞳。

全部大好きで、いつか親孝行するからと何度も言っていたのに、ある日母親は俺の前から糸が切れる様に居なくなった。

ガンによるものだった。

俺が13歳の時には分かっていたらしい。

でも母親はその事を病院の検査で知ったとき、祖母に話し、最後にこう言ったそうだ。

『私が死ぬまで、この事は礼桜には言わないで』と。

俺は母親の異変に気付かなかった。

薬で抑えていたらしいが、俺が居ない間にも何度か倒れていたらしい。

何にも気付けなかった自分を怨んで母親の居ない家に帰り、部屋に入ると机に手紙が置かれていた。

母親からだった。

中には、ここ最近付けることを見なくなっていた、母親が肌身離さず付けていたブレスレット。

それと薄い水色の手紙。

内容には、自分を怨まないで。やしっかり生活していくんだよ。と
いつもの母親らしい言葉がつづられていた。

そして最後に、

『貴方が来るまで待つてるからね』

と書き足されていた。

字はすこし震えていた。

きつと母親は自分の死を感じていた。

だから俺にこの手紙を残した。

そして俺はこの日、母親の形見のブレスレットを身につけ、自分は
しっかり母親の分も父親の分も生きていくと誓ったはずだった。

終わった

しかし、一年後、今日。

俺の命はあっさりと終わりを告げてしまった。

両親の分も生きていくと誓った約束を守れない悔しさの反面、早かったが『死』への謎を解くことが出来る事が嬉しく、俺の心は踊っていた。

……え？

何で死んだかって？

猫さ。

俺は車に轢かれそうになった猫を助けたつもりで、猫と一緒に死んでしまった。

普段なら猫なんて気にしていなかった。

でも、その黒猫は少し母親に似ているような気がしてならなかった。優しそうな瞳や雰囲気は母親に似ていた為に気がつけばその猫を庇っていた。

そして俺は死んだ。

場所

そして俺は今、暗闇の中に居る。

「…………どこだ？ここ」

やばい。

早速やばい。

完全に道に迷った。

真っ暗闇。

明かり一つ無い。

なのに何故か景色も手も少し見にくいが一応見える。

景色といっても暗闇の中に一人一人が通れる程の細い道がある。

進まなくてはいけないが、念のために暗闇に目が慣れるまで動かないほうが良いだろう。

今動けば完全に足を踏み外してこの終わりのなさそうな闇に落ちてしまう。

俺は共に死んでしまった黒猫を抱えて、その場に立ち尽くした。

とりあえずこの道を真っ直ぐ進んでいけば良いんだろうが、慎重に行かなくては、きつとこの道から落ちれば…………

考えるのは止めよう。

これはマ オじゃ無いんだ。

俺は既に一回死んでいるんだ。

マ オの様に生き返れない、次は無いんだ。

…いや、もう無いけどさ。

猫

「さて…どうするかな…」

「着いてきて。」

…あれ？今声が…どこからだ？

「ここ。」

え？下？

でも、下には今立っている道と俺の抱えている黒猫…

ん？黒猫？

「そう。」

「は？黒ね…っつゝあゝえゝぐげあえええ！？」

「危ない声出さないでよね。」

俺は抱えていた猫を放り投げて後ずさる。

抱えていた黒猫は華麗に着地と言う。

いやいやいやいや…冷静にそんな事言われても普通なら出すと思う

よ、俺は。

あくまで、俺は。

「え、だつ、て！」

「私が喋ってるからでしょ？」

話す黒猫の問いに俺は全力でこれ異常無いほどに早いスピードで首を縦に振る。

「後でゆっくり説明してあげるから、それより、よく聞きなさい。」

あのね、今私達が居るこの場所は貴方の居た人間界と、簡単に言えば閻魔王とかが居る、死者を天国と地獄に分ける場所へつながる道。

「

…なるほど。俺は黒猫の金色の瞳に焦点を合わせたまま頷く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4879z/>

g i h a d 《ジハード》

2011年12月16日17時51分発行